

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520298

研究課題名(和文)ギリシャ悲劇の歌の、韻律にもとづく類型学

研究課題名(英文)Typology of the Songs in the Greek Tragedy

研究代表者

逸身 喜一郎 (Itsumi, Kiichiro)

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：40107420

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：ギリシャ悲劇には歌の部分が含まれている。このうちスタシモンと呼ばれる合唱歌は比較的、定義がしやすいが、それ以外の歌については、そもそもどのように分類すべきかまだ明確な定義すらない。本研究は歌を全体として把握して、どの歌とどの歌が似通っており違いがあるとすればいかに違うのかを叙述する。

分類の基準は 1 誰が歌うか(コロスが役者が両方か) 2 ストロフェー/アンティストロフェー構造であるか 3 歌の途中で歌い手がセリフを挿入するかである。総数265の歌についていちおうの分類はできたけれど分類そのものに問題点が残る。こうした個別的諸問題を概括したのが論文『悲劇の歌の類型学・序説』である。

研究成果の概要(英文)：There are many types of songs in Greek tragedy. They are classified according to (1) who sings and does not sing (2) whether it has antistrophic structure or not (3) whether the singer not only sings but utters. Stasimon is located at one end of the spectre and at the other, monody. Between these two so-called lyric dialogues or epirrhemata have their positions.

The songs amount to 265 and are provisionally classified. The classification is not so easy as has been supposed, however. There is no agreement even on the names of the songs in various styles. The problems are (1) how a song is differentiated from a series of songs (2) how lyric metre is differentiated from spoken metre, especially in the case of the iambic trimeter and others. In 'Typology of the Songs in Greek Tragedy: a Preliminary Survey' (Philologica, 9 (2014), 1-13) these are discussed in detail. A monograph 'Lyric Dialogues and Monodies in Greek Tragedies' is now in preparation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：西洋古典 ギリシャ悲劇 韻律

1. 研究開始当初の背景

「スタシモン」や「エペイソディオン」はアリストテレス『詩学』に由来する術語である。ただしスタシモンはともかくエペイソディオンは指示する範囲が大きすぎる。その中には役者どうしのセリフの応酬の部分のみならず、スタシモンに分類されないコロスの歌、あるいは役者の歌も入り込んでいる。もしこうした歌にたとえば「コンモス」(これは『詩学』にある名称)なり「アモイバイオン」(これは『詩学』にない)といった名前を与えると、それはエペイソディオンの下位分類にならざるをえない。これでは不便である。さらにまた歌の名前自体が混乱のものである。「コンモス」はアリストテレスがあげている名称であるが、それはアリストテレス自身が「嘆きの歌」である。歌い手がコロスであれ役者であれ、嘆きどころか喜びを歌っている歌に「コンモス」はやはりまずい。それを「アモイバイオン」といいかえても、今度は歌の応酬になっていないものには不適切な命名であろう。要するにすべての悲劇に共通させられる命名は、いまのところない。共通の名称がないということは、とりもなおさず対象の共通理解がないことを意味する。

このことはイギリスやドイツで個別に刊行されている悲劇の注釈書をみれば分かる。それぞれの歌の類例をあげることがあっても類例のすべてを網羅することなくその場に応じた説明をするだけで、体系化はいまだできていない。

2. 研究の目的

(1) 当初、目的を以下のごとく設定した。ギリシャ悲劇の歌の部分(コロスが歌うスタシモン、俳優の歌うコンモスといわれる部分、などを含むすべて)を三大悲劇詩人の全作品から収集し、それらの韻律を個別に分析して叙述したのち、歌全体を韻律的に分類することを試みる。つまり韻律をもとにした、悲劇の歌の類型学(タイポロジー)である。その最大の特徴は、歌を構成する個々の行の韻律分析にとどまらず、歌を全体として把握して、どの歌とどの歌とが似通っており違いがあるとすればいかに違うのかを叙述することにある。

(2) しかしながら研究を進めるうち、韻律に入り込む以前にまずは歌の分類そのものの厳密な基準の作成が不可欠であることがみえてきた。これに関しては世界的にいまだ共通理解が成立していないというよりも、共通理解を作ることに尻込みしている状態であるといつてよいからである。加うるにどこからどこまでが(例えば)スタシモンか、いいかえれば「この歌全体がひとつの歌なのか」「それともスタシモンと別の歌が続いている複合体ではないのか」という問題が見えてきた。なにをもってひとつの歌と決めるか、その定義にもまた、すべての悲劇を網羅した

基準が必要であるにもかかわらず厳密化されていない。さらにまた「歌」と「セリフ」の分別も、従来思われていたほどに単純ではないことが見えてきた。つまり研究開始時には自明であると予測していた前提がそれほど明確ではないことが分かることによって、分類の根本にまで問題が遡及していくのである。よって分類作業の厳密化そのものが目的となってくる。

3. 研究の方法

(1) およそ分類という作業につきものであるが、細部の差異を強調すれば個別例に還元されてしまい、分類そのものが成り立たなくなる。グループの境界に位置する諸例からある程度まで差異を捨象しなくてはならない。このことについての個別的諸問題点を概括したのが論文『悲劇の歌の類型学・序説』である。

(2) 「スタシモン」を厳密にするとすれば、次のような必要要件が考えられよう。

()コロスしか歌わない。()セリフは途中に含まれない。()ストロフェー/アンティストロフェーの対が最低でも1つある(astrophon ではない)。

(3) スタシモン以外の歌については、次のような基準が考えられる。コロスしかその歌に参加しない。俳優しかその歌に参加しない。コロスが歌い、俳優はセリフをはさむ。俳優が歌い、コロスはセリフをはさむ。コロスと俳優の両者が歌う。(補注・厳密に言えば「歌い、かつセリフを発する。」)ひとりの俳優が歌い、もうひとりの俳優がセリフをはさむ。ふたりの俳優が歌う。これに加えさらに当該の歌がストロフェー・アンティストロフェーの対からなるかどうか、形式区分には重要な指標である。おまけに上記区分の や に分類される歌には、ストロフェーとアンティストロフェーとで歌う役者が交代するものもあるから、厳密に分類するとさらに複雑になる。

加えてスタシモンではない歌の場合、(例えば)第1アンティストロフェーと第2ストロフェーとのあいだにセリフが入り込む場合がある。このセリフがどれくらい短かければ、それらを歌の中に割り込んでいるセリフ、さらにはその歌の一部、とみなしうるのか。逆にそれが何十行も続いたら、そもそもその前後の歌は別個の歌として扱うべきなのか。このことも分類を難しくする。

(4) とはいえ、スタシモンならびにコロスしか歌わない歌(上記区分の)を一方の極とし、ひとりの役者が歌ういわゆるモノディー(上記区分の)ならびに の一部)を他方の極とすれば、その他の歌はおおむね lyric dialogue とか epirrhema と呼ばれる歌に該当する。これらがおそらくもっとも体系的叙述が必要とされる対象である。

4. 研究成果

(1) 総数 265 ある歌についていちおうの分類はできた。私は目下のところ、スタシモン以外の悲劇の歌の部分についてつぎのような見取り図をもっている。アイスキュロスは作品ごとにより大胆に、自由な工夫をした。様式はその後に固まる。もしそうだとすると悲劇の起源に関する推測と連動することになる。いっぽうソフォクレスとエウリーピデースは類型化が著しい。とはいえ *astropha* は中後期のエウリーピデースで増加する。ソフォクレスはそれに影響された。こうしたことを説得的に叙述するために必要なことは、具体的に例をあげること、それも網羅することである。後期エウリーピデースの、いわゆる *Anagnorisis Duet* 上記区分の (しかしの可能性は残る) であり、かつ *astrophon* である____の類似性は誰もが認める例であるが、そうした試みを他の歌にも広げなくてはならない。

(2) 適切な分類がなされたら個々の歌の位置づけに様式史的にそれまで見えなかった展望がえられるかもしれない。その期待をもたせる例を次にあげる。

「俳優が歌い、コロスはセリフをはさむ」例(上記区分の かつ *str/ant* 対応あり)を集めると、ソフォクレスの 3 例しかない (Aj. 348 以下; OT 1313 以下; Ant. 1261 以下)。このことは意味深長である。これらソフォクレスの 3 例の歌にあっては、形式のみならず内容も似通った状況である。歌う役者はどれも男の役柄で、主役ないし準主役。そしてかれらは絶望している。それに対してコロスは「意味のない」なぐさめ、ないし諷刺をしている。3つの歌の類似性は、ソフォクレスはこのような場面にこのような形式の歌を入れることをレパトリーとしていたことを示唆する。いっぽうそれに対してエウリーピデースは、このような場面にあっても役者の独唱(上記区分の)や、コロスにセリフをはさませても *str/ant* の対応をなくして *astrophon* を好んだことが見て取れる。その理由として考えられるのは、純粋に劇様式に対する美意識の変化の問題もあるだろうし、役者がどれだけ長い歌を歌えるか、という役者の力量という上演形態の制約の問題もある。しかしこうした問に答えを探すのは、すべての歌の分類と叙述とが終わってからでも遅くはない。

(3) ここまでギリシャ悲劇がセリフと歌とでできているということは大前提として受け入れてきた。この前提を受け入れてなお、生じてくる問題がふたつある。

(i) 歌の中で、とりわけ役者の歌の中で *iambic trimeter* がでてくるのが少なからずある。こうした *iambic trimeter* は歌の韻律の一部であるとみなす(いいかえれば歌われたと考える)べきか、それともその個所は、歌ではなくセリフとなっていると考えるべきか。

(ii) 役者ないしコロスが相手の歌の途中

で「口をはさむ」 *iambic dimeter* は、たとえそこしか *dimeter* が存在せず他はすべて *trimeter* であっても、通常、*lyric metre* と解釈されている。その理由は *dimeter* である、ということにつきる。しかしこの *dimeter* は不完全な *trimeter* であって、すなわちセリフが中断された形とみなすことができないか。理由は薄弱であるとみとめざるをえないが、ふたつある。ひとつには「どうして他では語っているのにそこだけ歌うのか」という疑問、もうひとつは韻律上の形態である。

さらに歌の韻律の分析も様式史にかかわってくるのが予想される(これがそもそも本研究の出発点であった)。なぜなら役者の歌の韻律は *dochmiac* であることが多い。それはスタシモン以外のコロスの歌にあってあてはまる。*dochmiac* はしばしば激しい感情を表すのに適切な韻律とされる。それはたしかにそうであるが、役者の歌やスタシモン以外のコロスの歌それじたいが内容的に激しい感情であるから、と説明することもできる。「鶏と卵」の関係である。韻律分布と歌の分類は大きな課題である。

先にも述べたように、個別的諸問題点を概括したのが論文『悲劇の歌の類型学・序説』である。これは今後、研究を深化させる基準点となる。そしてさまざまな問題点を考慮しつつ、すべての歌を網羅して以上のような分類を叙述するには、モノグラフが必要となる。目下(仮称) *Lyric Dialogues and Monodies in Greek Tragedies* の執筆を進めているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

逸身 喜一郎 「悲劇の歌の類型学・序説」『フィロロギカ』(査読有)9巻 2014 pp.1-13

〔学会発表〕(計2件)

Kiichiro Itsumi, 'Anceps: Appropriate Applications of its Concept', *Fédération internationale des Études classiques, XIVe congrès*, 2014.8.25 - 2014.8.30 l'Athenée municipale, Bordeaux, France (招待講演)

逸身 喜一郎 「ギリシャ悲劇の構成部分・再考」(古典文献学研究会)2013年10月19日 大阪大学

〔図書〕(計3件)

逸身 喜一郎 岩波書店 『バツカイ』(翻訳・解説付) 2013年 231

逸身 喜一郎 NHK出版 『ギリシャ神話は名画でわかる』 2013年 253

逸身 喜一郎 岩波書店 『ラテン文学を読む——ウェルギリウスとホラティウス』2011年 xii + 230

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

逸身 喜一郎 (ITSUMI, Kiichiro)

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授)

研究者番号：40107420

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし